

## 三田図書館・情報学会研究大会ラウンドテーブル 「図書館情報学研究と科学研究費補助金」

### 【背景と主旨】

2017年度三田図書館・情報学会研究大会では、図書館情報学研究にとって科学研究費補助金（科研費）をどう考えるべきかというテーマでラウンドテーブルを実施することにいたしました。ラウンドテーブルとは、最近多くの学会で試みられている交流、討議の場を提供するものです。少数の話題提供者、質問・コメント提供者は事前に決めておきますが、参加者のより自由な発言を促すことで、講演会やシンポジウムよりも、参加者がより積極的に討議に関われる場となることが期待されています。

今回は、図書館情報学分野にとって重要でありながら、研究発表のテーマにはなりにくい、「科研費」について、自由な意見交換ができればいいと考えました。

外部資金で研究費を獲得し、研究をすることは理系の学問分野、特に国立大学では当然という慣習がありますが、人文・社会科学系の学問分野においては、多額の資金を必要とするわけではないこともあり、これまでそういう傾向はありませんでした。しかし、昨今では外部資金を獲得することが研究者の評価の指標とされたり、人文・社会科学系の学問分野でも他分野との共同研究、国際化などが推奨され、科研費の獲得が重視されるようになってきていると考えます。

図書館情報学のように、学際的で新しい学問分野の場合、科研費を獲得することは、単に研究者が自分の研究を推進するための資金を得るという意味だけではなく、文科省が日本の学術研究の中で図書館情報学をどう位置づけているのかも反映していると考えます。現在、図書館情報学は、「総合系、情報学分野、情報学フロンティア分科、図書館情報学・人文社会情報学細目、A分割」で独自の細目と見なされています。しかし、科研費の審査方式が平成30年度申請分から大幅に変更されます。人文・社会科学はまとめて一つの大区分になり、残りのいわゆる理系の分野が10に区分されます。「図書館情報学および人文社会情報学関連」という細目は残りますが、キーワードによる分割はなくなり、また二つの大区分に属することになります。図書館情報学という研究領域としてのまとまりで審査してもらうことは、現在以上に困難になると考えられます。

科研費の審査と学問領域とは同じものではありません。しかし、このような環境の変化は、図書館情報学という研究領域のあり方を考える格好の機会になるのではないかと考えました。科研費を獲得してきた研究者も、これから獲得を目指したい若手研究者も、科研費を巡って普段感じていることを、意見、提案、コメントなど、どのような形でも自由に討議できる場となることを願って、ラウンドテーブルを実施いたします。